

『金色夜叉』と『嵐が丘』

——その類似性を探る——

東 郷 裕

序

尾崎紅葉による『金色夜叉』¹⁾は読売新聞紙上に、明治三十年から三十五年にわたって断続しながら連載された未完の小説である。主人公貫一は第一高等中学校の学生で身寄りがなく、鳴沢家に同居している。この家の娘宮は貫一と許嫁の関係にあるが、正月のかるた会で銀行家の息子富山唯継に見染められ、求婚される。宮の両親は結婚を承諾し、その償いとして貫一を将来洋行させると申し出る。彼はこれを不服とし、熱海の海岸で宮に本心を確認するが、彼女の心は富山との結婚に傾いていることを知る。貫一は怒り、嘆き、そして絶望して姿を消す。この恨みを晴らそうとの思いで高利貸しの手代となり、金銭を取り立てる冷酷な「夜叉」に変わり果てる。一方で富山と結婚した宮は夫を愛せず、自分の行いを悔いて貫一に詫び状を送り続けるが、彼は一向に受け付けない。次第に身体が弱っていく宮が死を願うことを記した手紙を書いたところで、『金色夜叉』は未完に終わっている。

この小説は事実に基づくと考えられる一方で、²⁾種本があるのではないかと考えられていたが、その一つに19世紀に活躍した英国生まれの作家バーサ・エム・クレイ (Bertha M. Clay 本名 Charlotte Mary Brame, 1836-84) の『ドラ・ソーン』 (*Dora Thorne*, 出版年不明) が指摘されてきた。だが、2000年に堀啓子氏によって、種本が同作者による『女より弱き者』 (*Weaker Than A Woman*, 出版年不明) であることが特定された。

確かに堀氏が指摘しているように、『女より弱き者』の話の筋、登場人物の言葉の言い回し、状況設定が『金色夜叉』のそれらと酷似してい

る箇所が散見されるのは確かである。³⁾しかし、クレイと同時代のエミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) の『嵐が丘』(Wuthering Heights, 1847) の読了後に受ける印象も『金色夜叉』のそれと不思議なほど良く似ている。

この小説は、嵐が丘に住む裕福なヨーマン階級のアーンショウ家の主人が、ある日浮浪児を連れて帰ってきてヒースクリフと名付けて養う。アーンショウ家の長兄ヒンドリは彼を軽蔑し冷遇するが、妹キャサリンは彼と親密になっていく。アーンショウ夫妻が亡くなるとヒンドリはヒースクリフを下僕よりも過酷な扱いをし、知識欲や向上心を失わせる。一方、スラッシュクロス屋敷に住む紳士階級のリントン家にも二人の子供エドガーとイザベラがいて、ある日エドガーがキャサリンに結婚を申し込む。キャサリンはヒースクリフを自分の分身であると確信しながらも、リントン家の上品で優雅な生活にあこがれてエドガーと結婚する。これをきっかけにヒースクリフは姿を消し、三年後教養と財産を備えた紳士として再び現れるが、その目的は自分を墮落させ、虐げてきた両家を相手に復讐をすることである。しかし計画通りに進んだ復讐を、キャサリンの娘二代目キャサリン・リントンと、ヒンドリの息子ヘアトン・アーンショウを自分がされたように徹底的に貶めていけば成し遂げられるという時に、ヒースクリフは復讐を止めてしまい、自らを死に追いやることで物語は終わる。

『嵐が丘』と『金色夜叉』のあらすじを説明するだけでは、類似性はほとんど感じられないが、注意して読めば両作品の中に共通点がいくつか発見できるし、その上全体的な類似性が強く意識させられる。そこで本稿では、この二つの小説の具体的な共通点を上げながら検討し、読了後になぜ類似性を感じさせ、似たような印象を与えるのかを探ってみたい。

間貫一とヒースクリフの共通点

『金色夜叉』の主人公間貫一と、『嵐が丘』の主人公ヒースクリフの共通点はいくつかあるが、ここでは重要な点、つまり両作品の類似性を強く意識させる要因となる共通点を検討する。それは貫一とヒースクリフの両者ともが、物語の途中で顔つきと人格が大きく変わる点である。こ

れが重要であるのは、顔つきと人格が変化すること—偏屈や人嫌い—によって、話の流れが大きく変わる転換点となっているからだ。

貫一は幼少のころから親と別れて鳴沢家に世話になっており、この家の娘宮と許嫁の関係にある。貫一には身寄りがなく、身内に近い関係で信頼できる人物がお宮であるという点では、ヒースクリフとキャサリンの関係に近い。貫一は当初「篤学のみならず、性質も直に、行も但しかりければ、この人物を以って学士の冠を戴かんには、誠に獲易からざる婿なるべし」(上巻 27) と、鳴沢夫婦に期待されていたのだが、宮との縁が破談になり、鳴沢家を出て姿を消し、第一高等中学校を中退し、学問をすっかり捨て、高利貸しの手代になってからの貫一は、彼を知る人も分からぬくらいに顔つきと人格がすっかり変わってしまう。

彼を識れりし者は定めて見咎むべし、彼の面影は尠からず変りぬ。愛らしかりし処は皆失せて、四年に余る悲酸と憂苦と相結びて常に解けざる色は、自ずから暗き陰を成してその面を蔽えり。撓むとも折るべからざる堅忍の気は、沈鬱せる顔色の面に動けども、かつて宮を見しようの優しき光は再びその眼に輝かずなりぬ。見ることの冷に、言うことの謹めるは、彼が近來の特質にて、人はこれのために狎るるを憚れば、自らもまた苟も親みを求めざるほどに、同業者は誰も誰も偏人として彼を遠ざけぬ。(上巻 116)

この貫一の変貌ぶりについての描写、特に「自ずから暗き陰を成してその面を蔽えり」、「沈鬱せる顔色の面」という顔つきの変化や、「見ることの冷に、言うことの謹めるは、彼が近來の特質」のために、他人は「狎るるを憚れば、自らもまた苟も親みを求めざるほどに、誰も誰も偏人として彼を遠ざけぬ」という状況に陥っている彼についての描写は、キャサリン・アーンショウがエドガー・リントンに心を移し、ヒースクリフに対して冷淡になってきた頃のヒースクリフの様子の変化を、家政婦ネリーが語る場面を強く意識させる。

顔立ちが悪いわけでもなく、知恵の働きが鈍いわけでもないのに、その心も姿も—いまのあの人を見ては思い当たることもできませんが、実に不快な印象を与えるような人間に、自分で作り上げていま

した。……昔はいくらかは、知識をもとめる好奇心とか、本や学問への愛情とかを持っていたかも知れないのですが、……それが消えうせてしまっていました。……それから、人相も心の墮落と歩調を合わせてまいりました。いつのまにか、だらしない姿勢になり、下卑た顔つきになりました。生まれつき口数のすくない性質でしたが、いよいよひどくなってしまって、ほとんど気が変になったのかと思うほど人嫌いで陰うつになり、わずかばかりの知り人からも、良く思われるよりは、その悪感をそそることに意地悪な喜びを持っていたとしか見えませんでした。(68)

ヒースクリフも同様に知的好奇心や「本や学問への愛情」を失った後、「実に不快な印象を与えるような人間に、自分で作り上げて」いき、「下卑た顔つきに」なるという外見と顔つきの変化を経て、「口数のすくない性質でしたが、いよいよひどくなってしまって」、「人嫌いで陰うつ」な状況に陥っている。

両者とも以前とは見分けがつかないほどに顔つきと人格が変わってしまう原因が、信頼し、愛している女性の裏切りである点は同じである。彼らの人格が変わり、「偏人」、「人嫌い」となるにつれて、周りとの人間関係が断たれ、孤独に陥り、恨みや憎しみに取りつかれる。これら負の感情に囚われた彼らは、結果として人生の大半を、恨みを晴らすことや復讐することに費やしてしまうことになるのは、二人はこの後、新たな人付き合いを望まず、自分独自の世界に閉じこもり、恨みと復讐心に取りつかれて、そこから抜け出せなくなっていくからだ。

宮とキャサリン・アーンショウの共通点

宮とキャサリン・アーンショウの二人の共通点を意識させるのは、結婚を断る場面である。この場面は物語の中のクライマックスであり、貫一とヒースクリフの人生の分岐点となるという意味で非常に重要である。

貫一の宮に対する思いは、ヒースクリフのキャサリンに対する思いと同じく、強いものである。貫一は「美しき宮を妻にするを得ば、……彼はなかなか夫婦に増したる權を懐きて、ますます学問を励みたり」(上巻27)の毎日を送る。宮は貫一にとって学士になることへの原動力と

なっているのであるが、一方で宮は貫一との結婚を貫一ほど熱望はしてはいない。「宮も貫一をば、憎からず思えり。されど恐くは貫一の思える半には過ぎざらん」（上巻 27）という程度である。その理由は彼女は過去の経験上自分の美貌がもっと上流階級の男性に見染められて良いはずだと考えているからである。

謂うべくんば、宮は己が美しさの幾何値するかを当然に知れるなり。彼の美しさを以てして纔にかほどの資産を嗣ぎ、類多き学士風情を夫に有たんは、決して彼が所望の絶頂にはあらざりき。（上巻 27）

従って宮はこれからの人生を次の様に考えても不思議ではない。

今にも貴き人または富める人または名ある人の己を見出して、玉の輿を昇せて迎えに来るべき天縁の、必ず廻到らんことを信じて疑わざりき。（上巻 28）

資産家の富山唯継が宮に結婚を申し込んだ時、貫一ではなく富山を選ぶのは当然の判断である。

熱海の浜辺で、貫一は宮に「一体今度の事〔富山との結婚〕は翁さん姨さんの意から出たのか、またはお前さんも得心であるのか」（上巻 76）と問い詰めるが、彼女は無言と「泣音を洩らす」と「堪忍して下さい」（上巻 77）の繰り返しで要領を得ない。貫一は自分が欺かれたと悟り、怒りを抑えながら宮に向かって「奸婦」（上巻 79）と罵倒する。宮が自分を捨て、富山に奪われたと確信すると、貫一は「恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、ほとほと身も世も忘れたる」（上巻 80）ほどになり、苦痛のあまり尻餅をつき、宮の手をとり、あの有名な台詞を口にする。

「ああ、宮さんこうして二人が一処にいるのも今夜限りだ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物を言うのも今夜限だよ。一月の十七日、宮さん、善く覚えて置き。来年の今月今夜は、貫一は何処でこの月を見るのだから！ 再来年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、

死んでも僕は忘れんよ！」(上巻 81)

貫一のこの言葉に並々ならぬ決意を感じたのか、宮は漸く今の自分の胸の内を少しだけ明かす。

「私も考えたことがあるのだから、それは腹も立とうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱していて下さいな。私はお肚の中には言いたい事が沢山あるのだけれど、あんまり言い難い事ばかりだから、口へは出さないけれど、たった一言言いたいのは、私は貴方の事は忘れはしないわ——私は生涯忘れはしないわ。」(上巻 82)

しかし、宮は貫一が知りたい事、つまりなぜ彼を捨てたかという問いには答えておらず、「言いたい事」とは何であるかを明かさない。

更に彼は「忘れんくらいなら何故見棄てた。」(上巻 82) と質問を切り返す。宮は見棄てはしないと断った上でこのように説明する。

「だから、私は考えている事があるのだから、最少し辛抱してそれを——私の心を見て下さいな。きっと貴方の事を忘れない証拠を私は見せるわ。」(上巻 82)

やはり「考えている事」の説明は最後までなく、「忘れない証拠」とは何かが不明である。ついにしびれを切らした貫一は宮と富山の結婚を「それじゃ富山は財があるからか、して見るとこの結婚は慾からだね、僕の離縁も慾からだね」(上巻 83) と自ら判断を下す。

宮の言う「考えている事」の中身は不明で推測するしかないが、貫一と宮の浜辺での話し合いの場面から遡ること数時間前、母親と宮の会話にそのヒントがある。富山との結婚に多少の罪悪感を感じている宮に、母親は以下のように説得する。

「またお前が彼方〔富山家〕へ適って、末々まで貫一さんの力になれば、お互いの仕合というものだから、そこを考えれば、貫一さんだって……、それに男というものは思切りが好いから、お前が心配しているようなものではないよ。」(上巻 63)

母親の言う「末々まで貫一さんの力に」なるとは、先の宮の「考えている事」と同じだとすれば、想像できるのは「金銭の援助」や富山の「社会的影響力」による貫一への何らかの形での「援助」であろう。

結婚の理由を財産目当てと言わずに、棄てた相手を金銭で助けるため、と正当化するの、キャサリンがヒースクリフではなく、エドガーと結婚することに決めた理由をネリーに語っている場面と重なる。キャサリンはネリーの「どうしてエドガーを愛しますか」(78)の問いに、「あの人はお金持ちになる。あたしは、このあたりでいちばんの令夫人になる。あたし、ああいう夫を持って、得意だわ」(78)と答える。同時にキャサリンはこの結婚に自らも疑問を感じ、「あたしの魂の中か心臓の中かで、あたしが間違っているのが、はっきり分かっている！」(80)と説明する。が、それでもなおエドガーと結婚する理由を次の様に語る。

「もしヒースクリフとあたしが結婚すれば、こじきになるばかりよ。けど、もしあたしが[エドガー・]リントンと結婚したら、あたしはヒースクリフを助けて、りっぱな人にしてやって、兄なんかに指一本ささせなくしてやるのだわ。」(82)

「こじきになる」という現実避けたいと考えるキャサリンだが、「あれ[ヒースクリフ]の魂とあたしの魂とは、同じもの」(81)であり、「あたしの命にかけて、だれのためにだって、あたしたちは離れない」(82)、結局のところ「あたしはヒースクリフなのよ、ネリー！ 彼は、いつも、いつでも、あたしの中にいる」(82)という確信を持ちながらエドガーと結婚することになる。

キャサリンは自分とヒースクリフが同一人物であると認めながらも、それを理由に結婚には踏み切らない。ヒースクリフと結婚しない代わりに、彼女は「ヒースクリフを助けて、りっぱな人にして」やると言うのだが、それは「ご主人のお金を使ってですか、キャサリンさん？」(82)とネリーが指摘するように、エドガーの財産を使ってヒースクリフに「金銭的援助」をするつもりである。

このように、宮は「貴き人または富める人または名ある人の己を見出して」くれたと考え、キャサリンも「あたしは、このあたりでいちばんの令夫人になる」と考えて、本当に愛する人とは結婚せずに、その代わ

りに断った相手に金銭的援助を暗示する、あるいは提示している点が共通しているのは極めて興味深い。

人物関係の共通点

貫一もヒースクリフも「偏人」、「人嫌い」なので、人付き合いは少ないが、このごく限られた人間関係の中にも極めて重要な人間関係の共通点が存在する。

物語の終盤で貫一は貸付先の調査のために塩原温泉の旅館に向かう。そこで心中を計画している恋仲にある若い男女、狭山と静に出会い、間一髪のところまで止めに入る。静は愛子の名で勤めに出ている新橋の芸者で、あの富山から八百円で身請け話を持ちかけられている。雇い主の養母からはこの話を引き受けるようにと連日責めたてられている。一方狭山は静のもとに通うために勤め先の紙問屋のお金を着服し、穴埋めのために始めた株にも失敗して三千円を使い込む。問屋の主人は姪と結婚すれば借金を帳消しにするが、しなければ告訴し刑務所に送ると選択を迫る。このように、富山と養母から逃げ出した静と、お金の遣り繰りに困った狭山はこの旅館で落ち合い、心中を図ろうとしていたのであった。一通り事情を聞いた貫一は静に向かって言う。

「それではこういうのですな、貴方は勤をしておっても、外の客には出ずに、この人一箇を守って——そうですね、」

「さようです。」

「そうして、余所の身請を辞って——富山唯継を振ったのだ！ そうですな。」

「はい。」

……

「ああ……感心しました！ 実に立派な者です！ 貴方は命を捨てても……この人と……添いたいのですか！」

……

「勿論そうなけりゃならん事！ それが女の道と謂うもので、そうあるべきです、そうあるべき事です。今日のこの軽薄極まった世の中に、とてもそんな心掛けのある人間は、私は決して在るものでは

ないと念っておった。もし在ったらば、どのくらい嬉しかろうと、そう念っておったのです。私は実に嬉しい。……涙が出るほどうれしいのです。私は人事とは思わん、人事とは思わん訳があるので、別して深く感じたのです。」(下巻 205-7)

貫一が、静の狭山に対する命をかけた一途な想いを聞き、「人事とは思わん訳がある」と考えるのは、宮と自分との関係を思い、重ね合わせているからであろう。特に静の「その人 [狭山] が死ぬと言うのに、私一箇残っていたって、しようがありは致しません。貴方が死ぬなら、私も死ぬ」(下巻 212-3) という言葉に貫一は「さながら我が宮の情急に、誠壮に、凜たるその一念の言を、かの当時に聴くらん想い」(下巻 213) がするほどに感銘を受ける。貫一は、静が宮であってほしいと思うと同時に、自分と宮の理想の関係を狭山と静の中に見出して、そうあって欲しかったと考えるのである。

また狭山と静の関係を目の当たりにして、宮との破談から七年経って漸く悲しみと怒りが治まる。

彼 [貫一] はほとほとこの女 [静] の宮ならざるをも忘れて、その七年の憂憤を、今夜の今にして始て少頃も破除するの間を得つ。信に得難かりしこの間こそ、彼が宮を失いし以来、ただこれに易えて望みに望みに望みたりし者ならずとせんや。(下巻 213)

狭山と静の命を賭した純粋な恋こそが、貫一と宮の理想の恋だったことが判明したばかりでなく、七年間高利貸しという闇の世界で「夜叉」として生きてきた「貫一が久渴の心は激しく動かされぬ」(下巻 213) ののである。その上冷酷に生きてきた彼に久方ぶりに人間らしい感情が生まれる。貫一は静に対して、狭山に対する想いを称賛しながらも自らの経験と重ね合わすことで彼の宮への想いを明らかにする。

「千万人の中からただ一人見立てて、この人はと念った以上は、勿論その人のためには命を捨てるくらいの上簡がなけりゃならんのです。その覚悟がないくらいなら、始から念わん方がいいので、一旦念ったら骨が舍利になろうとも、志を変えんというのでなければ、

色でも、恋でも、何でもないです！ で、もし好いた、惚れたというのは上辺ばかりで、その実は移気な、水臭い者とも知らず、這箇は一心になって思窮めている者を、いつか寐返を打れて、突放されるような目に遭ったとしたら、その棄てられた者の心の中は、どんなだと思えますか。」(下巻 214)

更に貫一は自分が考える理想の恋を二人が成就するのを見届けたいという強い願望までも生じてくる。

「それに就けても、貴方のその美しい心掛、立派な心掛、どうかその宝は一生肌身に附けて、どんな事があるとも、決して失わんようにして下さい——よう御座いますか。そうして、貴下方はお二人とも長く、です、いつも今夜のようなこの心を持って、睦しく暮らして下さい、私はそれが見たいのです！」(下巻 215)

貫一は狭山と静の借金を帳消しにしてやり、その上二人を麴町の自宅に引き取る。次第に「心信かなるお静こそ、僅にも貫一がこの頃を慰むる一のため一の者なりけれ。」(下巻 228) と考えるようになり、彼女と狭山を自宅に住ませ、「お前さんが陰陽なく実に善く気を着けて、親身のように世話をしてくれるのを、私は何より嬉しく思っている」(下巻 235)。このように、貫一は二人と出会い、二人の関係に自分と宮の関係を投影し、静の狭山に対する思いに感銘を受け、憂いと憤りが少しの間静まる。そして二人を引き取ることを契機に、七年間「夜叉」であり続けた貫一は、少しずつ人間味を取り戻し、気持ちも和み始める。

一方、ヒースクリフにもこれと似た人間関係が存在する。彼は復讐相手であるヒンドリの一人息子ヘアトンの養育を引き受け、自分が住む嵐が丘の屋敷に住ませる。彼の目的は自分が受けた同じ仕打ち、つまりヘアトンを召使同様どころか、動物並みに扱い、教育の機会を与えず、粗野で無教養な若者に育てるためである。

またエドガーとキャサリンの間の一人娘であるキャシー（キャサリン・リントン）をも、両親が亡きあと引き取り、ヘアトン同様に扱う。ヒースクリフがこの身寄りのない二人を引き取ったのは、この二人が彼の復讐の相手であるリントン家とアーンショウ家の唯一の子孫であり、

この二人を徹底的に貶め、破滅させることが彼の二十数年間にわたる復讐の最終的な目的であるからだ。しかし、復讐が完結するあと一步のところでヒースクリフはヘアトンとキャシーの間に愛情が芽生えていることに気づき、二人の目に在りし日のキャサリンを見る。

二人〔ヘアトンとキャシー〕が、一時に目をあげると、ヒースクリフの目と出合いました。たぶん、あなたさまは、二人の目はまったく同じだと、お気づきではないと思いますが、それはどちらも、あのキャサリン・アーンショウの目なのです。……しかしヘアトンといえば、ずっとよく似ています。それは、いつもふしぎな思いをおこさせるのですが——あときは、とりわけて強く心を打ってきました。それは、彼の感覚がするどく、彼の知能が、いままでになかったほど、いきいきとしていたからです。こんなにも似ていることが、ヒースクリフの心をやわらげたものと思われる。(322)

この二人の目がよく似ていることに気付いた直後、ヒースクリフは復讐を止めてしまう。

「なさない大詰めだったようだな……おれの猛烈な苦心惨憺の仕事のけりにしては、ばかばかしいな。……昔のかたきどもに負けずに生きてきて、いまこそやつらの身代わりのものらに復讐するときがきたのだ。それはできるし、だれもじゃま立てするやつはおらぬ。だが、それが何になる？ 俺はたたきつけたくない。手をあげるのさえ、おっくうなのだ！」(322-23)

彼が復讐を止めた理由は決して文字通り「おっくう」になったからでもなく「怠け者」になったからでもない。「あいつ〔ヘアトン〕はびっくりするほどキャサリンに似ていて、気味が悪いほど、キャサリンと一つになってしまう」(323)と同時に、

「ヘアトンの姿というものは、おれの不滅の愛の、そしておれの権利をつかみとろうとするがむしゃらな努力の、おれの墮落の、おれの誇りの、おれの幸福の、おれの苦悩の、亡霊だった。」(324)

ことを悟ったからである。つまり、キャサリンとよく似た目を持つヘアトンとキャシーを徹底的に貶めることは、自分とキャサリンを破滅させることに他ならないという事実にはースクリフは気づき、その上二人の中に愛情が芽生えていることも認め、二人の姿に自分とキャサリンの姿を重ね合わせたからこそ、復讐の虚しさに気づき、断念したのである。

このように、ヘースクリフはヘアトンとキャシーの目が「どちらも、あのキャサリン・アーンショウの目」であり、よく似ていることが「ヘースクリフの心をやわらげ」、ヘアトンは自分の「亡霊」であることに気づき、二人の愛情関係の中に自分とキャサリンの理想の関係を見出したことで、長年にわたる復讐心を捨ててしまう。これは貫一が、狭山と静の関係に、自分と宮の関係を重ね合わせることで、長年の恨みが和らぎ、人間らしい感情を取り戻す状況と極めてよく似ている。

恨みを晴らす手段と復讐を果たす手段、 及びその問題の共通点

長年をかけて貫一は恨みを晴らそうとし、ヘースクリフは復讐を果たそうとするが、その手段とその結果生じる問題点もまた共通している。

高利貸しの同業者赤樫満枝が、貫一に資本の提供を申し出ると同時に交際を迫るが、その申し出を彼が断る場面がある。この時に彼は自分が高利貸しの手代になった経緯を満枝に語りながら、現在の胸中を初めて語る。これは重要な場面なので少し長いが以下に引用する。

「不正な稼業と謂うよりは、もう悪事ですな。それを今日始めて知ったのではない、知って身を墮したのは、私は当時敵手を殺して自分も死にたかっくらい無念極まる失望をした事があったからです。その失望というのは、私が人を頼みにしておいた事があって、その人たちも頼まればならん義理合いになっておいたのを、ふとした慾に誘われて、約束は違える、義理は捨てる、そうして私は見事に売られたのです。……

実に頼少ない世の中で、その義理も人情も忘れて、罪のない私の売られたのも、原はといえば、金銭からです。仮初にも一匹の男子たる者が、金銭のために見易えられたかと思えば、その無念という

ものは、私は一……一……一生忘れられんです。

軽薄でなければ詐、詐でなければ利慾、愛相の尽きた世の中です。……売られた人たちを苦しめるようなそんな復讐などはしたくはありません、ただ自分だけでいいから、一旦受けた恨！ それだけは屹と霽さなければ措かん精神。片時でもその恨を忘れることの出来ん胸中というものは、我ながらそう思いますが、まるで発狂しているようですな。それで、高利貸のような残刻のはなはだしい、殆ど人を殺すほどの度胸を要する事を毎日扱って、そうして感情を暴していなければとても堪えられんで、発狂者には適當の商売です。そこで、金銭ゆえに売られもすれば、辱められもした、金銭のないのも謂わば無念の一つです。その金銭があったら何とでも恨が霽されようか、とそれを楽に義理も人情も捨てて掛って、今では名誉も色恋もなく金銭より外には何の望みも持たんのです。また考えて見ると、愁い人などを信じるよりは、金銭を信じた方が間違いがない。人間よりは金銭の方がはるか頼になりますよ。頼にならんのは人の心です。」(上巻 124-5)

宮との結婚が破談になって以来、貫一の心を占めていたのは「見事に売られた」という思い、それも「金銭のために見易えられた」という「無念」から生じる「恨」である。そして「感情を暴していなければとても堪えられん」ので、高利貸しに身を墮としたと説明し、「金銭があったら何とでも恨が霽されようか」と考えている。つまり貫一は高利貸しの手代となり、冷酷無慈悲な取り立てを行うことで、宮が自分を裏切って富山に心を移したことへの恨みの感情に耐え、財産を蓄えることで恨みを晴らそうと考えている。

しかし「売られた人たちを苦しめるようなそんな復讐などはしたくはありません」と考えている貫一が、恨みを晴らそうとしている相手はお宮なのか、富山なのか、それとも拝金主義的な当時の世の中なのか、最後まで判然としない。いずれにせよ、貫一の恨みの根源は、宮が自分を捨てて資産家の富山を選んだことに対する怒りと、宮の父親であり恩人でもある鳴沢隆三が結婚を諦める代わりに洋行を勧めて、その費用を提供することを申し出たことで感じた屈辱にある。言い換えれば宮が貫一の愛情や人間性よりも金銭を選んだこと、鳴沢が人心を金銭で買えると

判断したことから明らかになった金銭至上主義に対する怒りと屈辱から、貫一の恨みは生まれたのである。この一件で、貫一の言葉を借りれば、世の中は「畢竟利の一字」（上巻 58）であることを十五歳で知ることになる。学問に勤しみ、理想に燃えた前途有望な若者にとっては、この事実は受け入れがたいが、同時に金銭の持つ力を痛感する。そこで金銭を大量に稼ぎ、蓄えることで恨みを晴らそうと考える。貫一は金銭を得るために高利貸しの手代となり、恨みの表現方法として七年にわたる冷酷な「夜叉」となることで、結局はその恨みの根源である金銭至上主義に自らが陥り、「怒い人などを信じるよりは、金銭を信じた方が間違いがない。人間よりは金銭の方がはるか頼になりますよ。頼にならんのは人の心です」という思想を持つに至る。

一方ヒースクリフの復讐の動機と対象は何であろうか。ヒースクリフの復讐心が生まれたきっかけは、ヒンドリが彼に与えてきた残酷で非人間的な扱いに対する報復であるが、エドガーとの結婚の際に財産を問題にしたキャサリンは復讐の対象ではない。ヒースクリフは自分の復讐についてキャサリンについて語る。「君に手をかけて復讐しようとは思わない」、「そういう計画ではない。暴君は奴隷を踏みつぶすが、奴隷は彼に反逆しようとはせぬ。自分より下のものを苦しめるのだ」（112）。つまり彼の復讐とは、ヒンドリのみならず、彼の息子ヘアトンに自分が受けた同じ精神的、肉体的苦痛を与えることに他ならない。ヒースクリフに対して「聖者をでも悪魔にしてしまうほどの」（66）扱いをしてきたヒンドリも含めて、出自の分からぬ孤児だという理由で、ヒースクリフを排除、差別し、彼の人間性をも否定してきたリントン家とアーンショウ家、および両家に代表される当時の英国の社会体制こそが彼にとっての「暴君」で、復讐の動機でもあり対象でもある。この暴君に対して彼は二十年以上の時間を費やして復讐することになる。

しかし、ヒースクリフの行った復讐の最大の問題点とは、アーノルド・ケトルが述べているように、「暴君が持つ行動規範を用いて暴君に復讐することで、彼らの行動規範を明らかにしたが、自分の人間性も裏切ってしまった」（143）のであり、また同時に彼は「自分の中から魂を奪った社会体制に対して、その社会体制の持つ嫌悪すべき点を用いて復讐をするこしかできないので、地獄にとらわれてしまう」（イーグルトン 112）というところにある。

同じ問題点が貫一にも当てはまる。彼は、「ふとした慾に誘われて、約束は違える、義理は捨てる、そうして私は見事に売られた」ことの根源である金銭を「夜叉」となって稼ぐが、同時に「自分の人間性を裏切り、高利貸しの世界に身を置き、冷酷非道となり、旧友とは疎遠になり、人々から忌み嫌われる。彼が高利貸しの世界で得たものは金銭と孤独と厭世感のみである。結局貫一が何に対して恨みを晴らすつもりなのかは、ヒースクリフのようにその対象が明確ではないが、ただ一つ言えるのは、彼は非人間的な高利貸しの世界から抜け出せないで、彼の人間性が回復する希望は、狭山と静の関係の中に僅かに垣間見えるのみとなっていることである。

ヒースクリフは社会体制の持つ「嫌悪すべき点を用いて復讐をするこしかできないので地獄にとらわれて」しまい、そして貫一は金銭を用いて恨みを晴らそうとするが、高利貸しの冷酷無慈悲な世界に自らも染まり、抜け出すことができなくなることで「地獄にとらわれて」いると言える。これが両者の復讐に共通した手段であり、その問題点でもある。

類似性を感じさせる最大の要因

『金色夜叉』と『嵐が丘』には他にも細かな共通点は存在する。先に挙げた台詞を例にとると、貫一の「売られた人たちを苦しめるようなそんな復讐などはしたくはありません」、そしてヒースクリフの「君に手をかけて復讐しようとは思わない」という台詞は、言葉の持つ意味以上に重なってくる。というのは、二人とも同じく結婚を断られた上に、貫一は宮に、ヒースクリフはキャサリンに復讐心を抱いても良いようなものだが、二人ともそうは言わない点も同じだからだ。他にも二人とも結婚が破談になった後、数年間失踪し突然身分も職業も変わって戻ってくること、結婚後キャサリンも宮も心と体は別々になり、衰弱して死ぬ（宮は死ぬと予感させる）ことなども共通点として存在する。

しかしながら、これまで論じてきた四つの共通点の項目の中で、類似性を感じさせる最大の要因となっていたのは「恨みを晴らす手段と復讐を果たす手段、及びその問題の共通点」で指摘した二点が共通しているためであろう。つまり貫一の恨みの根源とヒースクリフの復讐の動機と、そしてその結果生じる二人の長期間にわたる恨みと復讐である。

貫一の場合は、「金銭のために見易えられた」結果、婚約を反故にされ、彼の愛情と人間性を蔑にされたことから恨みが生じ、一方ヒースクリフの場合は、孤児であるが故に差別と虐待、「聖者をでも悪魔にってしまうほどの」不当な扱いを受けてきたことから復讐心が生まれた。貫一とヒースクリフに対するこれらの行為に共通しているのは、両方とも突き詰めればその根底にあるのは、人間を人間たらしめている人間性の中で特に、人間の尊厳と自尊心を否定し、踏みにじる行為に他ならないという点である。

またこの行為がどれほど人間を侮辱し傷つけ、憤慨させるかを、二人は長きにわたる恨みと復讐でしか表現できなかつたために、「地獄にとらわれて」いたという問題点までもが共通している。これまでの四つの共通点の項目に加えて、特に以上の二点が『金色夜叉』と『嵐が丘』に共通しているからこそ読了後には、更に類似性を強く感じさせ、似たような印象を与えるのであろう。

註

- 1) 本稿でこの作品から引用する部分はルビを割愛し、引用頁数の前に上下巻の別を記す。
- 2) これに関しては、岸本文人著『「金色夜叉」に秘められた人間模様』（文芸社、2010）や森羅夢太郎著『金色夜叉のモデルたち』（文芸社、2008）に詳しい。
- 3) 堀氏のこの指摘に関しては、バーサ・M・クレイ著『女より弱き者』（堀啓子訳、南雲堂フェニックス、2002）pp.495-99の「注」を参照のこと。

引用文献

- 尾崎紅葉『金色夜叉』（上下巻）（岩波文庫、2011）
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. London: Penguin Books Ltd, 2003.
- Eagleton, Terry. *Myth of Power: A Marxist Study of the Brontës*. London: Macmillan Press Ltd, 1998.
- Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel 1*. London: Hutchinson University Library, 1974.